

第82回企画展

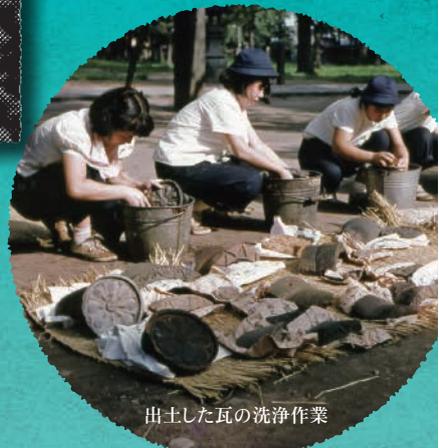
陸奥国分寺展

「発掘黎明期の挑戦者」

展示図録



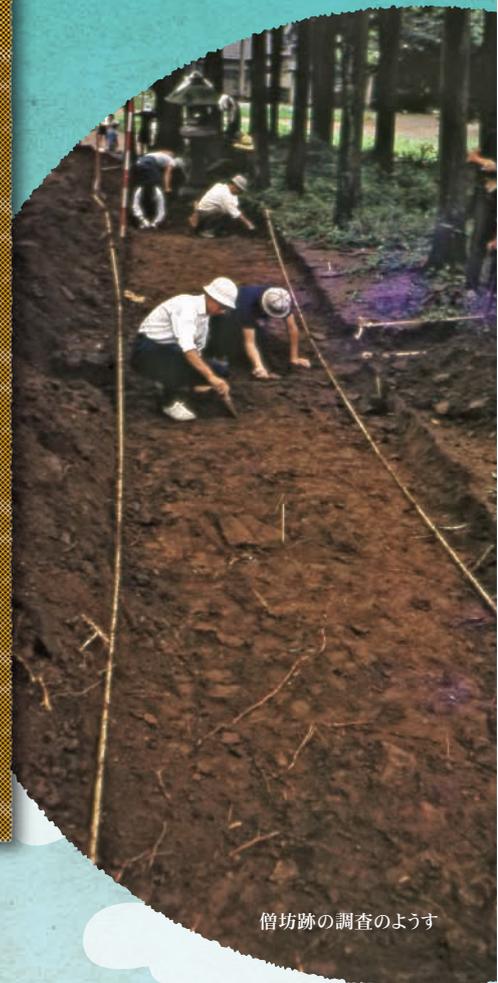
観音堂西側の調査のようす



出土した瓦の洗浄作業



西僧坊跡の調査のようす



僧坊跡の調査のようす

※写真は全て東北大学大学院文学研究科の所蔵

陸奥国分寺展



例言

- ・本書は東北大学大学院文学研究科、東北大学総合学術博物館、地底の森ミュージアム共催企画展示「陸奥国分寺展 一発掘黎明期の挑戦者」の展示図録である。
- ・図録掲載資料は、展示資料の一部である。
- ・企画展開催に当たり、仙台市博物館、仙台市教育委員会文化財課、および藤沼邦彦氏より多大なるご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

凡例

- ・本書に掲載した遺物は、東北大学大学院文学研究科考古学教室所蔵の資料である。
- ・陸奥国分寺の調査状況写真は、同考古学教室所蔵のものを使用した。
- ・遺物写真脚注の後ろに付した記号のうち、※印は調査報告書に掲載された資料であることを示す。☆印は菊地美紀氏撮影の写真であることを示す。
- ・掲載した遺物写真は、特に記したものの以外は、縮尺4分の1に統一している。

企画展情報

東北大学大学院文学研究科・東北大学総合学術博物館 地底の森ミュージアム共催企画
「第82回企画展 陸奥国分寺展—発掘黎明期の挑戦者—」
期間：平成29年10月20日（金）～12月17日（日）
会場：地底の森ミュージアム企画展示室

関連行事

ギャラリートーク

平成29年10月21日（土）14:00～15:00
担当：地底の森ミュージアム学芸員
会場：地底の森ミュージアム企画展示室

講演会

平成29年11月19日（日）13:30～15:30
講師：堀裕氏（東北大学大学院文学研究科 准教授）
会場：地底の森ミュージアム研修室

イベント「瓦にさわってみよう！（手話通訳付）」

平成29年11月26日（日）13:30～14:30
担当：地底の森ミュージアム学芸員
会場：地底の森ミュージアム展望ラウンジ



ごあいさつ

天平 13 年（741）、聖武天皇は仏教によって国家を治めるため、国ごとに国分寺と国分尼寺を設けるように詔を出します。平城京には、総国分寺として東大寺、総国分尼寺として法華寺がありました。陸奥国の国分寺は、現在の仙台市若林区木ノ下に建立され、その東側に国分尼寺が建てられました。

陸奥国分寺の発掘調査は、昭和 30 年～ 34 年（1955～59）に、東北大学の故伊東信雄教授を中心に行われ、創建当時の大規模な寺院の姿が明らかになりました。本展では、東北大学所蔵資料をもとに、最初の発掘調査の成果と、当時調査に携わった人々を中心に紹介します。

目次

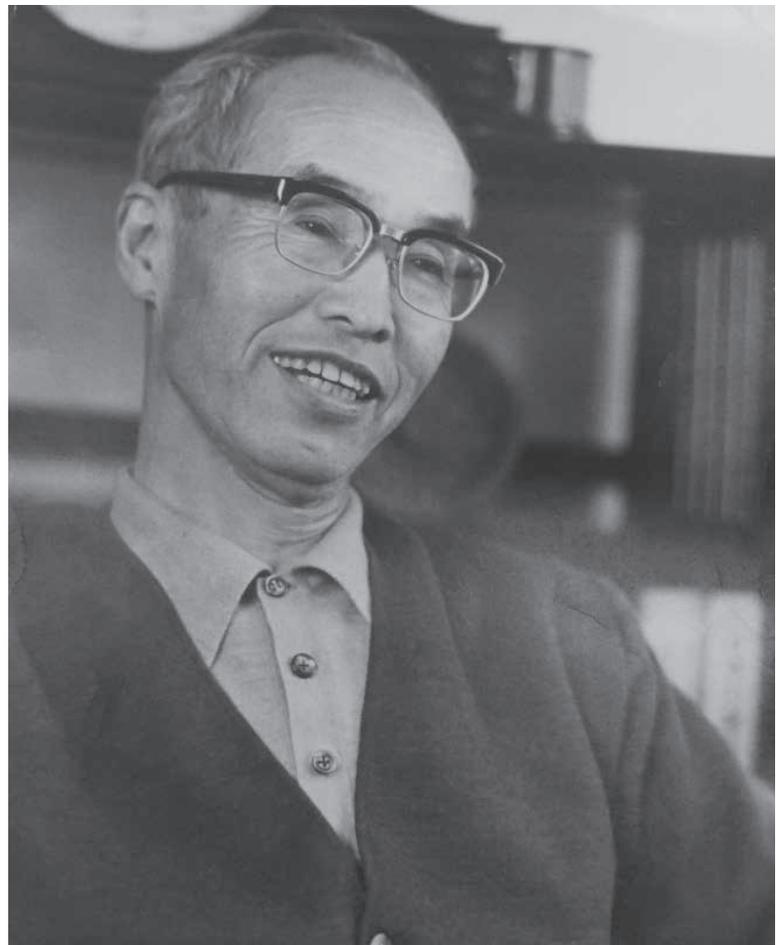
1. 伊東信雄氏の考古学研究	1
菜切谷廃寺の発掘調査	2
陸奥国分寺の発掘調査	3
2. 姿を現した陸奥国分寺	4
南大門と外郭施設	5
中門と廻廊	6
金堂	7
講堂、僧坊	8
塔と廻廊	10
僧坊西建物	12
鐘楼・経楼、その他の遺構	13
陸奥国分寺から出土した瓦	14
陸奥国分寺創建時の軒瓦	15
創建時の瓦のモチーフ	16
改修などに使用された瓦	17
3. 調査を支えた人々	19
4. 奈良・平安時代の文字	21
5. その後の調査と整備	23
陸奥国分寺年表	24



伊東信雄氏の考古学研究

陸奥国分寺の発掘調査の中心となった伊東信雄氏（1908～1987）は、東北地方の考古学研究の基礎を創りあげた研究者です。旧制第二高等学校の学生時代に、当時東北帝国大学医学部に勤務していた縄文文化研究者の山内清男氏と知り合い、考古学研究者への途を歩みます。東北帝国大学法文学部卒業後は、法文学部に寄託された資料の調査などを手がけ、第二高等学校講師を経て新制東北大学では教養部助教授となり、文学部講師を兼職します。昭和32年（1957）には東北大学文学部に考古学研究室が設置され、文学部教授となります。定年退職後は、東北学院大学で長く教鞭を執り、後進の指導にあたりました。

伊東信雄氏は、東北地方の縄文時代から江戸時代まで、幅広い時代の研究を行いました。第二次世界大戦後には、東北地方の弥生文化・古墳文化の調査・研究を中心にを行い、東北地方が他地域に比べて文化的に特段遅れた地域ではなかったことを、考古資料から明らかにすることに尽力します。昭和30年（1955）から、奈良・平安時代遺跡の調査を手がけますが、これらの調査は、宮城県教育委員会や地元自治体の教育委員会と連携して実施されたことが特徴です。



伊東信雄氏（1908～1987）
写真は藤沼邦彦氏提供。

菜切谷廃寺の発掘調査

昭和30年(1955)5月に、加美町菜切谷廃寺の発掘調査が、宮城県教育委員会が主催する最初の発掘調査として実施されます。文化財調査会委員として伊東信雄氏が発掘を担当します。調査成果は『宮城県文化財調査報告書第二輯』として報告されます。菜切谷廃寺の発掘調査は、開墾によって基壇跡の破壊が進む中で、遺跡の実態を明らかにして保存するために行われました。

側面に河原石を積んだ基壇が発見され、瓦が多数出土しました。多賀城跡から出土するものと同様の重弁蓮華文軒丸瓦や、近畿地方の遺跡から出土する瓦と文様が似ている均整唐草文軒平瓦などが出土しました。これらの成果から、宮城県北部に奈良時代の寺院が存在したことが明らかになりました。



菜切谷廃寺基壇全景（南から）
写真は宮城県文化財調査報告書第二輯より



菜切谷廃寺基壇西側の河原石積側壁
写真は宮城県文化財調査報告書第二輯より



菜切谷廃寺出土資料 左上：重弁蓮華文軒丸瓦、左下：均整唐草文軒平瓦、右：鬼板

陸奥国分寺の発掘調査

昭和30年(1955)8月から、陸奥国分寺の発掘調査が始まります。宮城県教育委員会、仙台市、河北文化事業団の3者からなる史跡陸奥国分寺発掘調査委員会が組織され、伊東信雄氏が調査担当者となります。昭和31年(1956)以降は、陸奥国分寺薬師堂興隆協賛会が加わり、構成団体は4者となります。

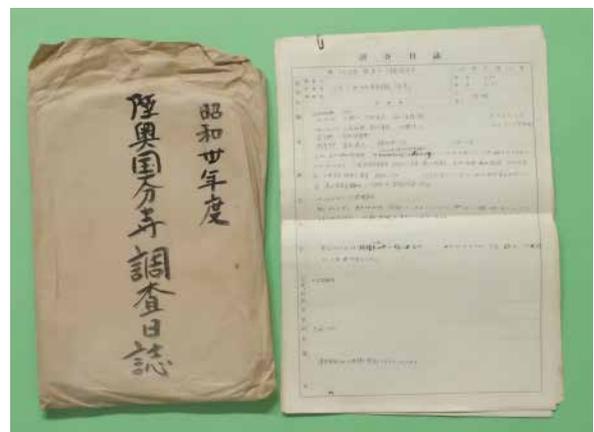
陸奥国分寺跡は、大正11年(1922)に国の史跡に指定されていましたが、建物建設などで遺跡が破壊される危機が大きくなってきたことから、遺跡の実態を明らかにして保存を図る目的で調査が実施されました。調査の実現には、昭和30年(1955)7月まで宮城県教育委員会教育長で、調査時には宮城県出納長であった三沢房太郎氏が、大きな役割を果たしました。当初は3年の予定であった調査は、重要な発見が相次ぎ、5年を要することとなります。

国分寺の調査と併行して、昭和31年(1956)栗原市花山廃寺、昭和32年(1957)涌谷町黄金山産金遺跡と、奈良・平安時代遺跡の調査が進められ、次々と重要な成果が得られていきます。

国分寺の調査終了後は、昭和36年～37年(1961～62)に多賀城市の多賀城廃寺の調査が行われます。昭和38年(1963)からは多賀城跡の発掘調査が始まり、現在の宮城県多賀城跡調査研究所の調査へ発展していきます。



僧坊跡の調査の様子



第1次調査初日の伊東信雄氏の調査日誌

昭和30年(1955)8月12日、陸奥国分寺跡第1次調査の初日の、伊東信雄氏自筆の調査日誌。調査日誌は、調査団長の伊東信雄と調査員が作成しているほか、調査補助員や参加した学生生徒が記載したものが残されています。

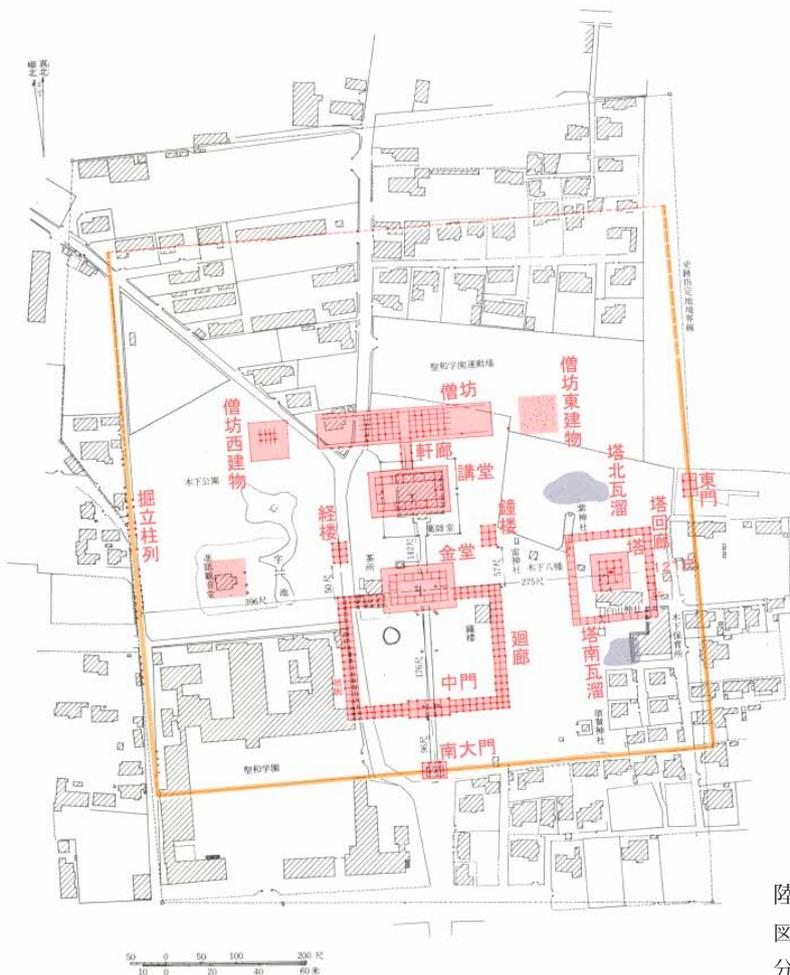
2

姿を現した陸奥国分寺

陸奥国分寺の発掘調査は5ヶ年にわたり実施され、寺院の主要施設の配置が明らかとなりました。国分寺の全体像が明らかとなった事例は、当時はほとんど無く、学術的に重要な成果となりました。調査成果の詳細な報告書は、発掘調査委員会の編集により、『陸奥国分寺跡』として昭和36年（1961）に刊行されました。

陸奥国分寺の寺域は、東西がおよそ800尺（242m）で、南北はそれ以上の規模になると推定されています。南辺の中央に、正門である南大門があります。南大門を入ると、中門・金堂・講堂が南北にならび、金堂と中門は廻廊で結ばれています。金堂の東側には廻廊に囲まれた塔が建っており、文献史料から七重塔であったことが判ります。講堂の後ろには僧坊が並んでいます。金堂と講堂の間にもやや小規模な建物があり、東側が鐘楼、西側が経楼と考えられています。

古代寺院は、瓦葺きの重い建物を支えるため、多くは整地して突き固めた基壇の上に、礎石を据えて柱を立てます。このような基壇や礎石、あるいは礎石を据えるために河原石などを詰めた根石を検出することで、建物の規模などが判明します。基壇の側面は、補強や化粧のために石や瓦などを積みあげる場合があります。



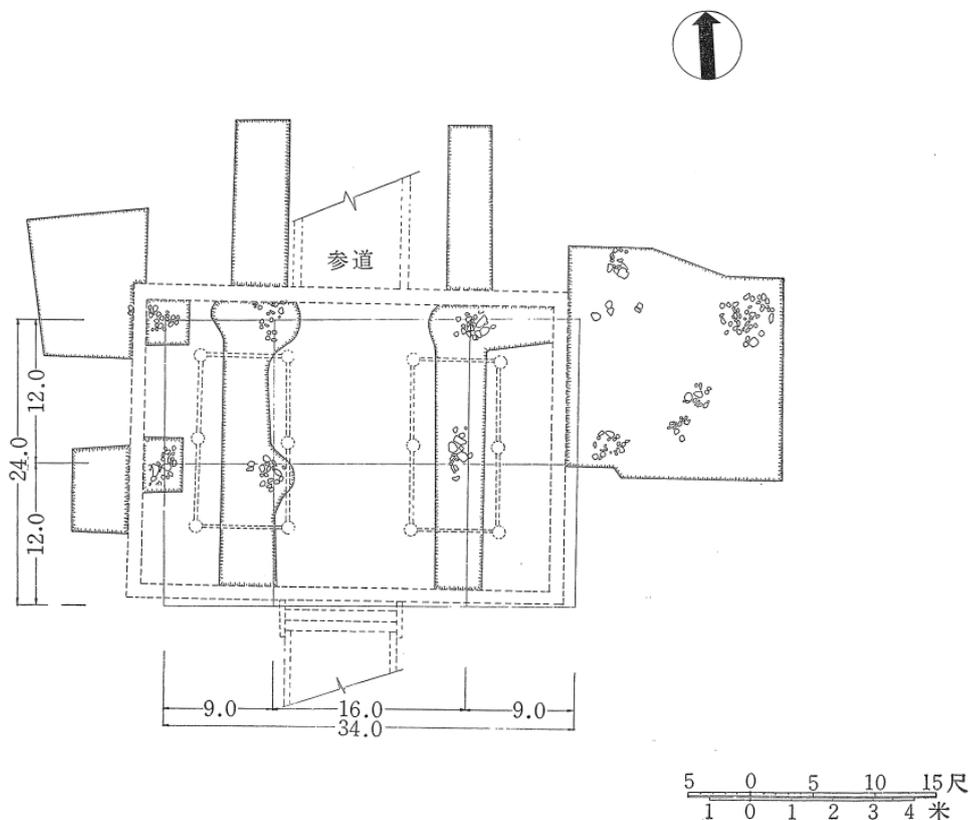
陸奥国分寺全体遺構配置図

図は発掘調査委員会編集の調査報告書『陸奥国分寺跡』より引用、一部改変

南大門と外郭施設

薬師堂の仁王門が建っているところが、陸奥国分寺の南大門にあたります。仁王門の礎石は、国分寺南大門の礎石を再利用したと考えられますが、本来の位置からは動かされていました。本来の礎石に伴う根石が6ヶ所で発見され、位置関係から東西3間、南北2間の八脚門であったと推定されています。基壇は周囲が削られており、正確な規模などは判りませんでした。平成20年（2008）に行われた発掘調査で基壇が確認され、東西約19.5m、南北約16mの大きさとなることから、想定されていた門より、大きなものであった可能性があります。

南大門の東側に、土塁状の高まりが残っていました。粘土と黒褐色土を交互に突き固めた積土で造られており、南辺区画の施設と考えられています。東辺では、講堂から東へ行ったところで、東門跡と推定される根石が3ヶ所発見されました。根石の周囲の積土層の広がりから、3間×2間の八脚門の可能性が指摘されています。西辺では、2列の掘立柱列が検出され、これが西辺の区画施設に関係するものと推定されています。北側の外郭施設は、調査できた範囲が狭いこともあり、確認できていません。その後の調査で、周囲を囲む施設は、築地塀であったと考えられています。



南大門跡平面図

図は調査報告書『陸奥国分寺跡』より引用

中門と廻廊

南大門の北側には中門がありました。礎石は残っていませんでしたが、12ヶ所で根石が発見されています。東西5間（18m）、南北2間（7.2m）の十二脚門であったと考えられます。基壇の保存状態は悪く、詳しいことは判りませんでした。

中門の東西には廻廊が設けられ、北に折れて金堂まで延びていました。廻廊では、3列の礎石や礎石の根石が確認されています。



廻廊から中門跡にかけての調査状況

北西から南東方向を望む。奥に見える建物は薬師堂仁王門

八脚門・十二脚門とは

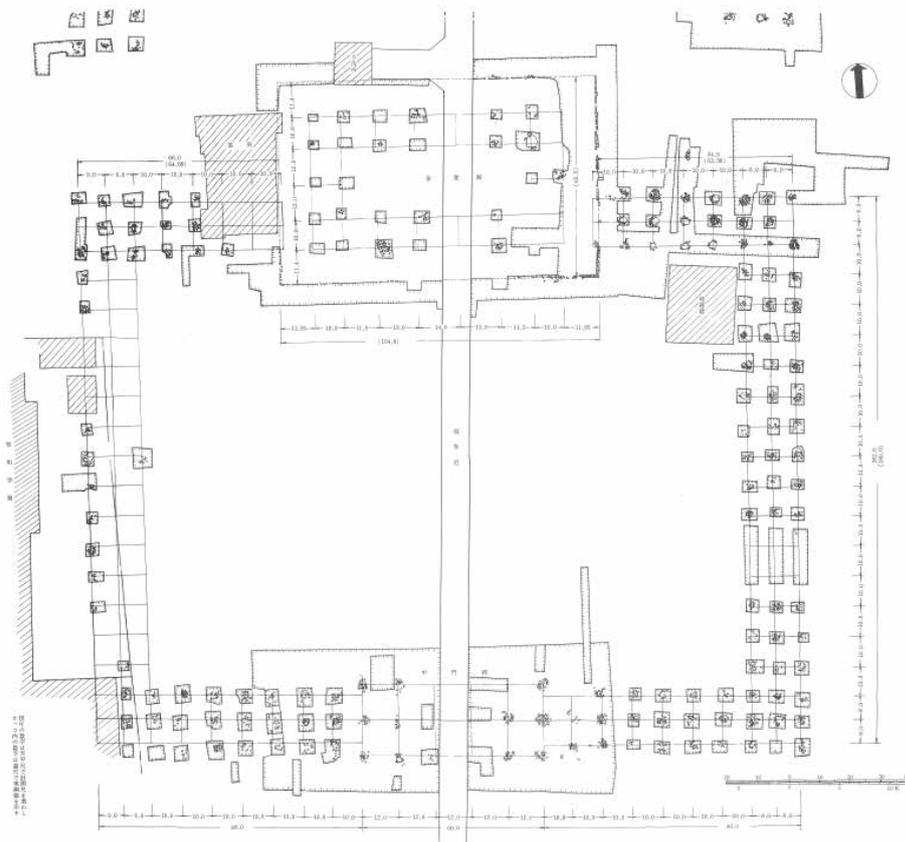
3間×2間の門の場合、門扉が付く中央の4本の主柱の両側に、控えの柱が4本ずつ伴い、両側では8本となるため八脚門と呼びます。5間×2間の門の場合は、門扉が付く中央の主柱は6本となります。控え柱は片側6本で、両側では12本となるため、十二脚門と呼ばれます。

金堂

金堂は、本尊が置かれる寺院の中心となる建物です。東西 31.7 m、南北 19.8 m の基壇が見つかりました。基壇の側面には、凝灰岩の切石を立て並べ、その外側に凝灰岩切石の地覆石が敷かれていました。このような凝灰岩切石による基壇の装飾方法は、講堂と塔でも見られました。1ヶ所で、礎石がそのまま残っていたほか、根石が 10ヶ所で発見されています。東西 7間 (24.6 m)、南北 4間 (13 m) の建物であったと考えられています。中門から延びてきた廻廊が、金堂の東西に取り付きます。



南東から見た金堂跡の調査状況
基壇の南辺と東辺の凝灰岩切石による装飾が見えています



中門跡・廻廊跡・金堂跡の平面図
図は調査報告書『陸奥国分寺跡』より引用

講堂

現在の薬師堂が、陸奥国分寺講堂にほぼ重なる場所に建てられています。そのため保存状態はあまり良くありませんが、東西 34.5 m、南北 20.4 m の基壇が発見されました。基壇の側壁は凝灰岩切石による化粧がなされていました。薬師堂の礎石は、国分寺の礎石を転用したと思われるものもありますが、本来の位置からは動かされていました。薬師堂の床下を調査したところ、5ヶ所で講堂のものと考えられる根石が発見されています。これらの根石の位置と、基壇の大きさなどから、東西 7 間 (28.8 m)、南北 4 間 (14.8 m) の建物が推定されています。

講堂の背後には、廊下（軒廊）があり、僧坊につながっていました。



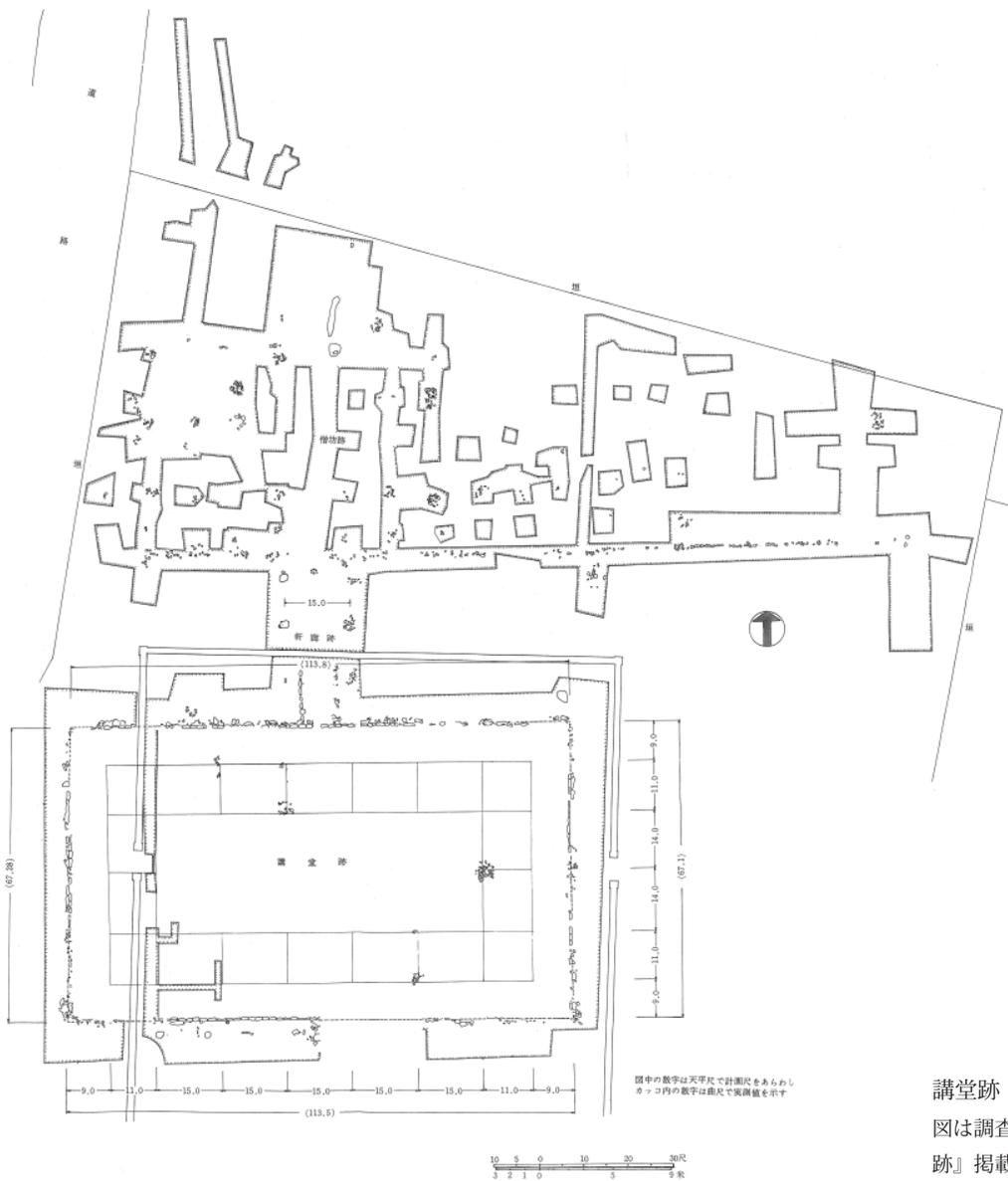
講堂跡基壇東辺の調査状況（北東から）

僧坊

僧坊は、杉林の中に位置しているため調査できた範囲が限られたことや、後世に壊されており、はっきりしない部分も多くあります。基壇の南端と思われる、瓦積みの列が、東西に長く発見されました。東西の長さは 70 m 以上になるものと考えられています。礎石は残っておらず、根石が 23ヶ所で発見されています。建物の詳しい様子は判りませんが、いくつかの小さな部屋に分かれていた可能性があります。



僧坊跡基壇南辺の
瓦積みの調査状況
(南西から)

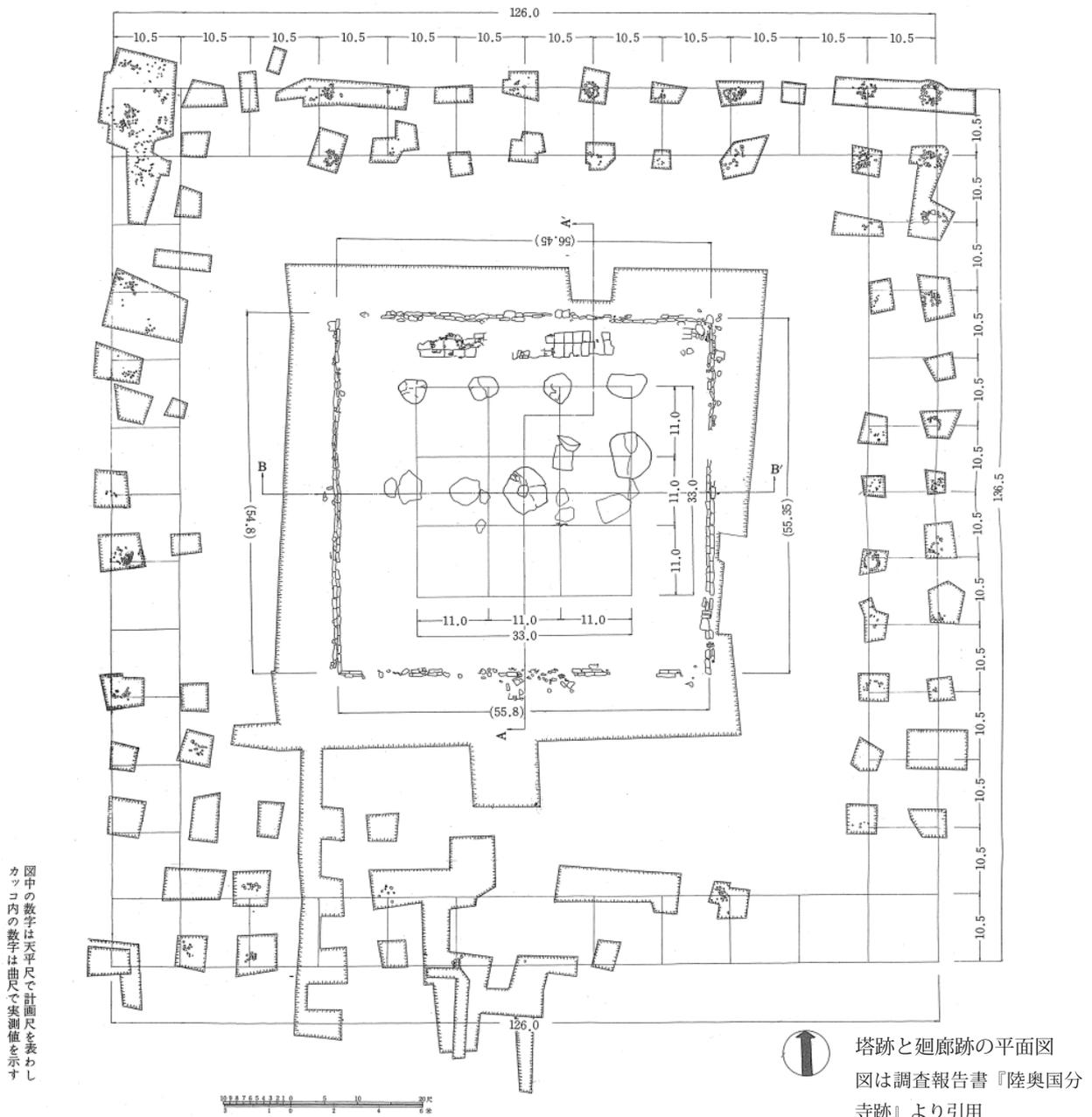


講堂跡・僧坊跡平面図
図は調査報告書『陸奥国分寺
跡』掲載図面を合成して引用

塔と廻廊

金堂の東側に、塔がありました。心礎を含む礎石が10ヶ所で知られており、早くから塔跡と考えられていました。基壇が良好に残されており、上面の敷石も一部で残っていました。周囲は凝灰岩切石による化粧がほどこされています。東西、南北とも3間の、一辺10 m程の大きさで、文献記録から七重塔であったことが判ります。基壇の北側から、塔のもっとも上に付く「檨管」と呼ばれる2 mほどの管状の部品が、逆向きに地面に突き刺さっているのが発見されました。塔は承平4年(934)に雷火で焼失したことが、『日本紀略』に記されています。塔が焼け落ちた際に、檨管が突き刺さったと考えられます。

塔の周囲には廻廊がめぐっていました。34ヶ所で根石が発見されています。根石は2列に並んでおり、単廊であったことが判りました。





北東隅から見た塔跡基壇の調査状況
基壇上面の敷石が残り奥には礎石が並んでいます



北東から見た塔跡北側擦管の発見状況



北西から見た塔跡基壇西辺の調査状況
凝灰岩切石による化粧の様子が判ります

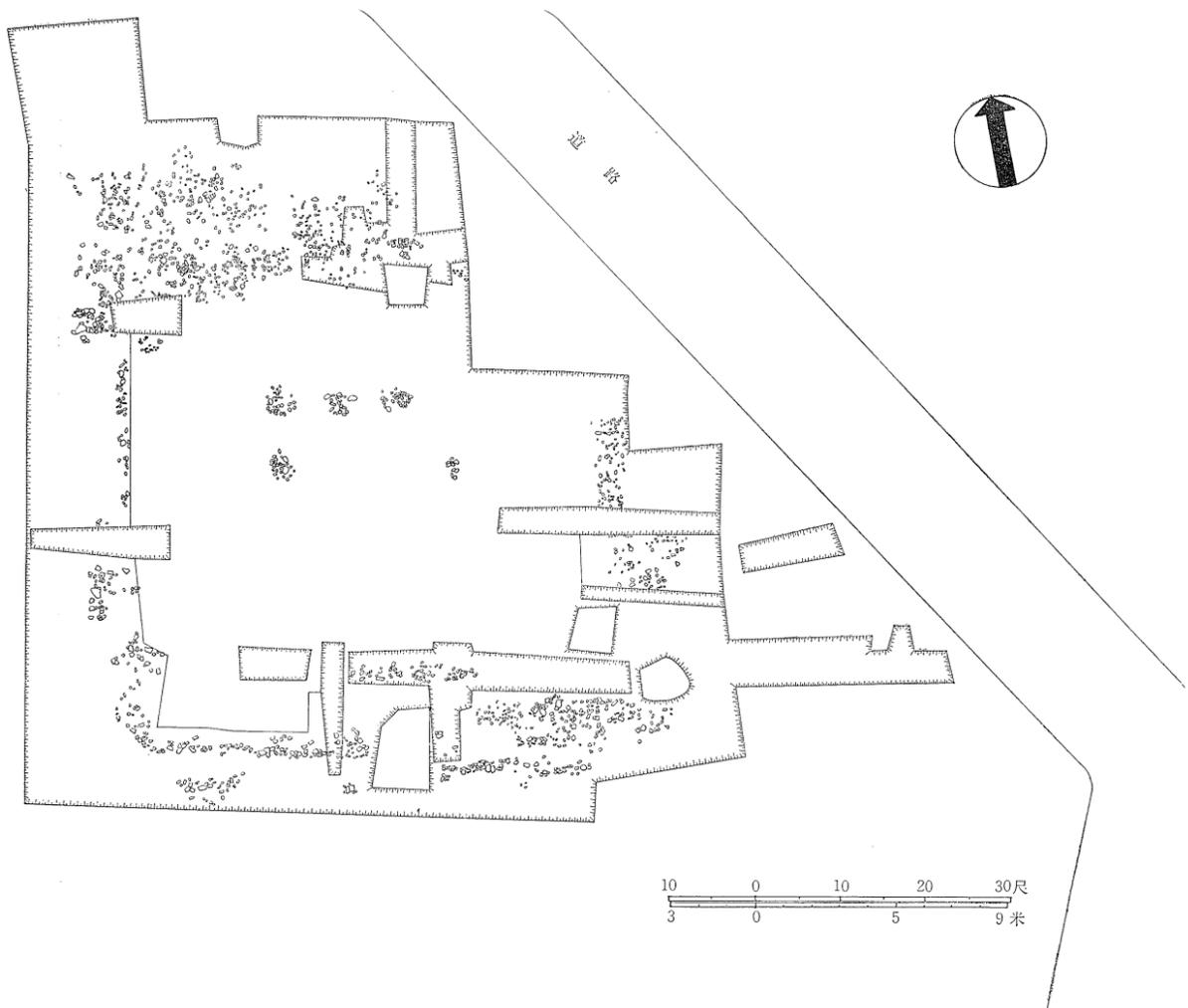
南西から見た塔跡基壇南辺の調査状況
ポールの位置が基壇南辺中央にあたります



僧坊西建物

かつて礎石が1ヶ所に残っていたことから、建物の存在が判り、調査が行われました。基壇が見つかりましたが、側壁の化粧積みはありませんでした。基壇の南辺と西辺は確認されましたが、東側と北側は保存状態が良くないため、明確になっていません。5ヶ所で根石が見つっています。東側を向いた、僧坊のような建物が想定されています。基壇の南辺から内側3mほどのところで、基壇の積み土の下から古い溝が発見されました。もともとの基壇の南側に継ぎ足す形で、拡張されたものと考えられます。基壇下層の溝からは土師器がまとまって出土し、「国分寺下層式」として東北地方の奈良時代の土師器の基準となっています。

僧坊をはさんだ東側にも、同じように建物が存在した可能性があります。近現代の破壊が大きく、国分寺の遺構は残っていませんでした。瓦が散布していることから、何らかの建物があったと考えられています。



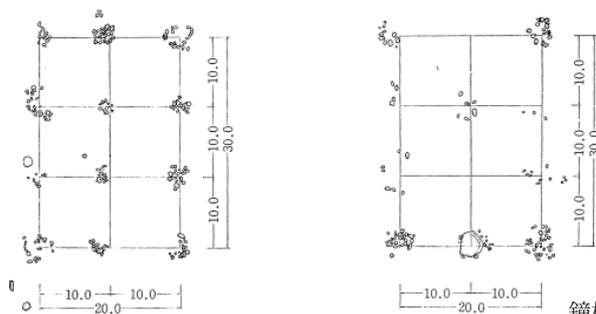
僧坊西建物跡平面図

図は調査報告書『陸奥国分寺跡』より引用

鐘楼・経楼

金堂と講堂の間の東側で礎石が1ヶ所残っていたため調査が行われ、根石が9ヶ所で発見されました。南北3間（8.9 m）、東西2間（5.9 m）の小規模な建物であることから、鐘楼と推定されました。

鐘楼から中心線をはさんだ、ほぼ対称の位置から、経楼が発見されています。12ヶ所で根石が見つかり、鐘楼と同じく、南北3間（8.9 m）、東西2間（5.9 m）の大きさであったことが判りました。



鐘楼跡・経楼跡平面図

図は調査報告書『陸奥国分寺跡』より引用

経楼跡

鐘楼跡



鐘楼跡の調査状況（南から）

その他の遺構

金堂の西方にある准胝観音堂は江戸時代の建物ですが、金堂をはさんで塔跡と対称の位置にあたり、土壇の上に建っています。そのため、もとは陸奥国分寺の建物が存在したのではないかと考えられ、周囲の発掘調査が行われました。観音堂の建設による破壊などもあり、明確な古代の建物は発見できませんでした。しかし国分寺の瓦が出土していることから、国分寺創建当初から何らかの建物が存在したと推定されます。

瓦をまとめて捨てた瓦溜が各所で見つかりましたが、塔の南側と北側には規模の大きな瓦溜がありました。

陸奥国分寺から出土した瓦

陸奥国分寺の発掘調査で、もっともたくさん出土した遺物は瓦です。古代の瓦は、平瓦と丸瓦を組み合わせた本瓦葺で、軒先に使われる軒丸瓦と軒平瓦に文様が付けられています。

瓦の研究は、軒瓦の文様を中心に進められてきました。各地の寺や役所の遺跡、窯跡などから採集された軒瓦を比較検討して、時期や供給関係などが明らかにされてきました。

史跡陸奥国分寺発掘調査委員会が作成した調査報告書でも、それまでに知られていた、多賀城跡などから出土した瓦などと比較して、その作られた時期や、相互の関係などの検討がなされています。



塔西側の瓦出土状況

本瓦葺の屋根と瓦の名称

- ①大棟（おおむね）
- ②丸瓦（まるがわら）
- ③平瓦（ひらがわら）
- ④鬼瓦（おにがわら）・鬼板（おにいた）
- ⑤軒丸瓦（のきまるがわら）
- ⑥軒平瓦（のきひらがわら）



奈良市元興寺極楽坊（極楽坊本堂）

陸奥国分寺創建時の軒瓦

創建時と考えられる瓦は、軒丸瓦では重弁蓮華文軒丸瓦、軒平瓦では単弧文軒平瓦、重弧文軒平瓦、偏行唐草文軒平瓦などがあります。文様の細かな違いによって、分類されています。

仙台市のJ R東仙台駅の北側から、北仙台駅の北側にかけて東西に延びる丘陵には、奈良・平安時代の窯跡が多数発見されており、台原・小田原窯跡群と呼ばれています。陸奥国分寺創建時の瓦は、ここで生産され、運び込まれたものと考えられます。



重弁蓮華文軒丸瓦第一類 ※☆



重弁蓮華文軒丸瓦第二類 ※☆



単弧文軒平瓦 ※



偏行唐草文軒平瓦第一類 ☆

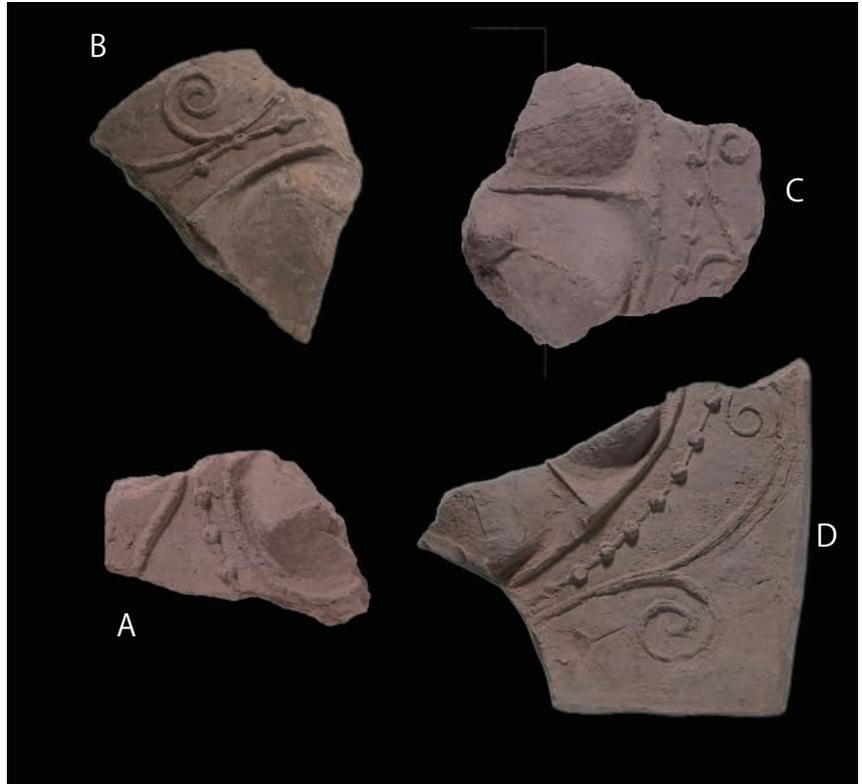
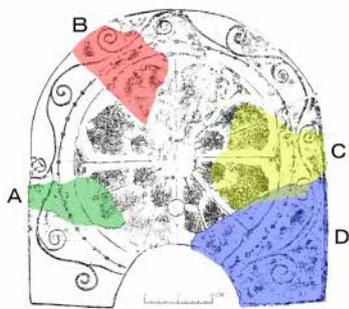
創建時の瓦のモチーフ

創建時と考えられる軒瓦の中で、最も数が多いのは重弁蓮華文軒丸瓦と左向きの偏行唐草文軒平瓦でした。ハスの花がつる草でつながれたモチーフが、陸奥国分寺を代表する瓦の文様であったと考えられます。

その後の調査研究で、寺と役所で、あるいは寺によって、使われる瓦の組み合わせが異なることが明らかとなっています。陸奥国分尼寺は、重弁蓮華文軒丸瓦と右向きの偏行唐草文軒平瓦の組み合わせが使われたと考えられます。陸奥国の国府であった多賀城では、重圈文軒丸瓦など、国分寺ではほとんど出土しない軒丸瓦も多数使用されています。



重弁蓮華文軒丸瓦第四類(左) ※、重弁蓮華文軒丸瓦第三類(右) ※
偏行唐草文軒平瓦第一類 右端は調査報告書掲載資料 縮尺不同



鬼板 ※

発掘調査で出土した資料と、以前から知られていた採集品を組み合わせ、全体の形が復元されています。重弁蓮華文軒丸瓦と同じ文様を中心に置き、周囲に左向きの唐草文が配されています。軒先を飾った文様と、同じモチーフが用いられています。

改修などに使用された瓦

創建後の改修などの際に使用されたと考えられる瓦も、大量に出土しました。これらは、貞観11年（869年）に発生した貞観地震からの復興工事で使用された瓦が多数を占めると考えられます。これらの瓦も、創建時と同様に、台原・小田原窯跡群で生産されたものです。

貞観地震では、陸奥国分寺も大きな被害を受けたと考えられます。朝廷は、「陸奥国修理府」を設置して、陸奥国府多賀城や、国分寺の復興工事を行いました。国分寺に隣接する薬師堂東遺跡では、梵鐘の鑄造を行った跡が見つかっており、地震からの復興工事に伴うものと考えられています。



宝相花文軒丸瓦第一類 ※



宝相花文軒丸瓦第二類 ※



宝相花文軒丸瓦第三類 ※☆



歯車文軒丸瓦 ※



細弁蓮華文軒丸瓦第一類 ※



細弁蓮華文軒丸瓦第二類 ※

2. 姿を現した陸奥国分寺



山形文軒平瓦 ※



均整唐草文軒平瓦第一類 ※



均整唐草文軒平瓦第三類 ※



連珠文軒平瓦第一類 ※☆



連珠文軒平瓦第二類

3

調査を支えた人々

陸奥国分寺の発掘調査は、調査団長伊東信雄氏のもと、東北大学の考古学関係者が調査員となり、学校の夏期休暇中の8月に実施されました。戦後の教育研究の中で培われてきた人材を結集し、それまでにない大規模な調査が実現しました。

陸奥国分寺の調査では、東北大学の卒業生の加藤孝氏（宮城学院女子大学助教授、肩書きは当時・以下同様）、氏家和典氏（宮城県第二女子高校教諭）、小野力氏（宮城県柴田農林高校教諭・30年度のみ）、伊具郡内の遺跡の調査を行い伊東信雄氏から考古学の指導を受けた志間泰治氏（宮城県大内中学校教諭）が調査員となり実施されました。調査員に建築学の飯田須賀斯氏（東北大学工学部教授）、坂田泉氏（東北大学工学部大学院生・32～34年度）が入っているのも、当時としては画期的なことでした。発掘調査は、加藤・氏家・小野・志間の各氏が、地区ごとに担当責任者となり、東北大学の学生などが補助員として作業にあたりました。氏家氏の指導する宮城第二女子高校社会部の生徒や、宮城学院の学生生徒、遺跡に隣接する聖和学園の生徒なども参加しました。



女子高校生による出土瓦の水洗作業



観音堂西側の調査の様子



僧坊西建物跡の調査の様子

僧坊西建物の調査では、基壇の下層から溝が発見され、埋土から土師器がまとまって出土しました。この溝は、国分寺創建時の僧坊西建物に伴うもので、その後の改修によって、基壇が拡張されたものと考えられました。この下層の溝からまとまって出土した土師器は、氏家和典氏によって検討され、奈良時代の土師器の型式として「国分寺下層式」と命名されました。



国分寺下層式土師器標識資料 ※ 土師器杯。写真は縮尺不同



この当時の本格的な製図は氏家和典氏の役目であり、陸奥国分寺跡の各遺構や全体の図はすべて氏家氏の手になるものである。氏は昼は勤務があるので、夜間や早朝、あるいは休日に研究室に来られ、製図台の上にトレーシングペーパーをのせて、納得のゆくまで心をこめて作業しておられた。ロットリングもトレース台もない当時、伊東信雄先生がかかわった報告書の図面のほとんどはこのようにして氏家氏が作ったものなのである。

工藤雅樹「昭和30年代の宮城県考古学界」『宮城考古学』第2号、2000年

土器実測図の報告書用版下 ※

出土した土器の実測図を製図して、図版の版下として組んだものです。陸奥国分寺の発掘調査報告書には、第24図として掲載されています。土器は氏家和典氏が担当して報告しているので、氏家氏が作成したものと推測されます。

4 奈良・平安時代の文字

陸奥国分寺の調査では、文字を記した瓦が多数出土しました。これらは、今から 1,000 年以上前の、奈良時代から平安時代の人々が書いた文字です。

瓦を製作する途中の、粘土が柔らかい段階で、書かれたり押捺されたものです。一文字だけのものも多く、何を意味するか判らないものも多くあります。地名や人名を省略して、一文字で表したという考えがあります。

捺印文字瓦 四角いハンコに一文字を刻んだものを、押捺したものです。写真は実寸



大 ※



占 ※



倉 ※



真 ※



石 ※



百 ※



伊 ※



物 ※



矢 ※

4. 奈良・平安時代の文字

指書き文字瓦 指で書かれたものと考えられ、浅い窪みとなっています。写真は縮尺不同

篋書き文字瓦 先の尖った篋状の道具で書かれたものです。写真は縮尺不同



指書き文字瓦 人 ※



指書き文字瓦 ○に大 ※



指書き文字瓦 祐 ※



篋書き文字瓦 □郡 ※
郡の名前を書いたと考えられますが残っていません。



篋書き文字瓦 保 ※

5

その後の調査と整備

仙台市教育委員会による、陸奥国分寺跡を史跡として整備するための調査は昭和 48 年 (1973) から始まりました。

昭和 48 年 (1973) に行われた調査では、陸奥国分寺創建期の瓦が出土したほか、江戸時代初めに薬師堂の瓦を焼成したと考えられている瓦窯跡が見つかりました。

昭和 58 年 (1983) に行われた調査では、南大門の東側に築地塀があったことが判りました。また、瓦が多く見つかったり、廃棄された瓦と考えられています。

平成 14 ～ 15 年 (2002 ～ 2003) に行われた国分寺東遺跡の調査では、陸奥国分寺が機能していた時期やそれ以降の遺構や遺物が見つかり、陸奥国分寺跡周辺の集落の存在などを知る手がかりを得ることができました。

平成 22 ～ 24 年 (2010 ～ 2012) に行われた薬師堂東遺跡の調査では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の他に復興期の梵鐘鑄造遺構が見つかり、この遺跡は、復興期の鑄造をはじめとする生産に関わる場所であったことがわかりました。

これまでの発掘調査成果をもとに史跡の整備が進められ、平成 29 年 (2017) 7 月に「史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設」がオープンしました。施設の隣には陸奥国分寺創建当時の意匠を取り入れた「天平廻廊」も整備されており、展示やガイドボランティアの説明によって陸奥国分寺・尼寺跡を詳しく知ることができます。



休息施設「天平廻廊」
史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設（写真右奥の建物）に併設しています。創建当時の廻廊を伝統工法により再現しており、屋根瓦には出土した瓦の文様が用いられています。

陸奥国分寺年表

時代	西暦	陸奥国	全国
飛鳥時代	645	この頃、陸奥国がおかれる。 郡山遺跡Ⅰ期官衙がつくられる。	大化の改新。 東国に国司を派遣。
	694	この頃、郡山遺跡Ⅱ期官衙がつくられる。	藤原京へ遷都、金剛明経を諸国におく。
奈良時代	710	多賀城をおく。 この頃までに陸奥国分寺、国分尼寺が つくられる。	平城京へ遷都。
	724		国分寺建立の詔を發布する。 東大寺大仏開眼供養。
	741		
	752		
平安時代	794	大地震がおきる。 陸奥国分寺の七重塔が雷火より消滅する。 陸奥国分尼寺の修理を願う。	平安京に遷都。
	869		
	934		
	1080		
江戸時代	1607	陸奥国分寺薬師堂が完成。	
明治時代	1903	陸奥国分寺薬師堂が国指定重要文化財に 指定される。	
大正時代	1922	陸奥国分寺が国史跡に指定される。	
	1923		
昭和時代	1955 ～ 1959	陸奥国分寺跡最初の発掘調査。	
	1972	仙台市教育委員会による陸奥国分寺跡 の発掘調査。	
	～		
平成時代	2017	史跡陸奥国分寺・国分尼寺ガイダンス 施設オープン。	

※飛鳥時代～江戸時代は仙台市教育委員会文化財課作成の年表を参考に作成しました。

東北大学大学院文学研究科・東北大学総合学術博物館 地底の森ミュージアム共催企画
企画展 「陸奥国分寺展 ―発掘黎明期の挑戦者―」 展示図録

初版：2017年11月16日

執筆・編集・発行

東北大学大学院文学研究科
東北大学総合学術博物館・同学生スタッフ
仙台市富沢遺跡保存館 地底の森ミュージアム

